

学校図書館探訪①¹ ～中央大学附属中学校・高等学校 学校図書館～

秋吉 和紀

はじめに 訪問の目的

本校の新しい図書館およびラーニング・コモンズの具体的な内容を考えなければいけない時期が近づいているが、学校図書館の計画と一口にいても、単に見た目の良い「ハコモノ」が建てば良いというものではない。その場をいかに魅力的にするかは「存在意義や目的」（何のために図書館があるのか）、「運営方法」（どのように活用するか/させるか）など、学校図書館の具体的な内容について検討していかなければならない。

本校に新設される予定の新図書館は、物理的な意味で「一中・一高の中心」に位置することになるが、それと同時に、象徴的な意味においても「一中・一高の学びの中心」として機能する施設にすることが肝要だ。そして、そこで行われる「学び」は新指導要領のあり方ともリンクする必要があるだろう。

高校は2022年度から「学制改革以来の大改革」と銘打たれた新指導要領の全面実施が始まる（中学校は2020年度から既に開始）。そうした「新しい学びのカタチ」を実現するような知の拠点づくりを行うにあたって、本校独自のプランをゼロから考案するのは、現状ではハードルが高い。取り得る現実的な方法としては、秀逸な先例に鑑みて、そこから本校で実現できる方法を模索することだろう。今回はそうした目的の下、学校図書館のトップランナーに「習う＝倣う」機会として、中央大学附属中学校・高等学校の学校図書館を訪問した。

中央大学附属中学校・高等学校 学校図書館の紹介

中央大学附属中学校・高等学校は東京都小金井市にある中高一貫教育校である（高校からの入学者もいる。詳しくは中央大学附属中学校・高等学校のホームページ²を参照のこと）。図書館（本館）に関しては、校舎から独立した3階建ての建物であり、所蔵資料は18万冊以上を誇る（中学校校舎には分館も別に存在する）。そうした紙媒体の資料だけでなく、電子媒体のデータベースや資料検索システムも充実している。また、建物そのものは「日本図書館協会建築賞」ほか、図書館関連の様々な賞を受賞している。学校図書館として「日本図書館協会建築賞」を受賞したのは、現在まで中央大学附属中学校・高等学校だけである。そのほか、司書教諭の専任化、電子資料の導入、電子書籍の導入など、その時代その時代において学校図書館として新たな取り組みにいち早くチャレンジし、現在でも学校図書館のト

¹ 昨年度の「学校図書館見学報告」からタイトルを改めた。

² <https://chu-fu.ed.jp/index.php>

ップランナーとして駆け抜けている。以下に、図書館視察の概要を箇条書きで記していく。

学校図書館視察の概要

(視察の日程等)

視察日時 : 2020年2月13日(木) 8:30~13:00
本校からの参加者 : 2名
ご対応いただいた先生 : 司書教諭 平野誠 先生
視察の概要 : 学校図書館の概要のご説明、図書館内視察(本館および分館)
図書整備や図書館設備に関する質疑応答



写真1 図書館(本館)
独立棟の3階建て

(発見や学び)

- ・生徒用プリンターや所蔵資料検索専用パソコンを複数配置している(写真2)。
- ・中高生が検索する際、目的の本に行きあたりやすいように、OPACシステムの検索区分に工夫を加えている。書名検索だけではなかなかヒットしないテーマに関しても、キーワードをOPACに細かく設定している。個人的な印象としては、SNSにおける「タグ」(twitterであればハッシュタグ)をつける感覚に近い。
- ・本の除籍はほとんどない。言い方をかえると、「除籍するような本」は購入していない。価値の定まった本を購入するという選書方針がある。
- ・専門的な「事典」が多いが、これを集めるには長い時間が必要。一時期に一気に集められるものではない。「事典」は販売点数が少ないため、逐一、新刊本の情報をチェックし、後に貴重書となるような事典は、すぐに購入している。(写真3)
- ・新書の数も多い。新書は各社のものを全点買いに近いかたちで購入している。新書は専門分野の入り口であるため、探究学習を行う際の出発点としやすい(写真4)。
- ・図書館は資料を探す場所。読み物系の文庫本は置いていない(文学全集などは資料として置いてある)。



写真2
蔵書検索エリア

写真3
図書エリアの入り口の事典
(所蔵されている事典のほんの一部)



写真4
新書エリア

・「ジャパンナレッジでの検索→新書→事典」といったかたちで、探究活動を行うときに、一般的な本から特殊な本へ、幅広い概説書からより専門的な書物へと、生徒の書物検索が上手く機能するようなシステムづくりが行われている。生徒自身と専門的な学問とが、段階的に繋がるように工夫されている。

・図書の発注・購入に関しては、全て司書教諭を経由して行われる。図書館の予算で購入する本、各教科で購入する本等、全ての発注を司書教諭のもとで集約しているため、学校として同じ本を購入することがないようにしている。副本購入はしていない。

・大きな災害や事件があったときには、その前後1ヶ月の新聞は資料として「全紙買い」をしている。実際に東日本大震災の時には、東北の新聞社も含め「全紙買い」を行った。それ

が、総合や探究の授業で貴重資料として役に立っている。

・雑誌のバックナンバーは6年間保管している。中1で入学した生徒達が高3で卒業するまでの間に発行された雑誌は、全て保管するという考え方。

・木製の書架は何でも良いというわけではない。中途半端なものを買うと、長年の使用に耐えられずに棚板がゆがんだり、破損したりする(写真5)³。

・地震にも対応できる書架を設置している(写真6および写真7)⁴。



写真5

壊れた書架の棚板

量販されている書架は棚板の密度が低く壊れやすい



写真6(左)および写真7(右)

平常時(左)は普通の書架と変わらないが、

大きな揺れが生じると、書架の手前がやや上に傾斜してスライドする(右)。

おわりに まとめと感想

今回視察した中央大学附属中学校・高等学校の学校図書館は、18万冊以上の蔵書を誇る点で、圧倒的な「コンテンツ」を有することは間違いのない事実である。しかしこれは、同

³ 書架メーカーである「天童木工」は良質な書架を提供していると説明を受けた。

<https://www.tendo-mokko.co.jp/>

⁴ 図書館用品全般を扱う「金剛」の商品。

<https://www.kongo-corp.co.jp/>

じぐらいの蔵書を集めれば同じぐらい魅力的な図書館ができる、ということの意味しない。コンテンツを充実させるのはもちろん大切なことではあるが、教育、学習、探究に積極利用される「コンテンツ」でなければ、蔵書や資料はただただ耽美の対象となり、骨董的な価値しか持たなくなる。そうならないためには、「どのような本を入れるのか？」ではなく、「どのような教育、学習、探究を達成するために、どのような本を入れるのか？」という考えにシフトさせる必要があるだろう⁵。この点は、本校の選書基準を見直すにあたっても課題としなければならない。

年間 800 時間を超える授業での高い稼働率や、図書館を利用した様々な実践報告を見れば、中央大学附属中学校・高等学校の学校図書館の豊富な「コンテンツ」が、単なる耽美の対象ではなく、生きた価値を持つものであることは明らかだ。豊富な蔵書量を活かすための教育実践が充実しているからこそ、この学校図書館が情報リテラシーだけではなく、アカデミックリテラシーをも涵養できる場となっているのだろう。やや抽象的に言えば、この学校図書館は、豊富な「情報=information」(内容知)が高いレベルで「情報=intelligence」(方法知、実践知)へと繋がる図書館なのである。

こうした魅力を有するため、この図書館は、子ども(生徒)だけではなく、大人(教員や保護者)も知的な昂揚感を覚える図書館となっている。視察中、司書教諭である平野誠教諭が「生徒の親にファンが多い学校図書館」とおっしゃったが、その言葉も十分にうなずける。実際に、今回の視察に参加した教員2名とも、中央大学附属中学校・高等学校の学校図書館に見事に魅了され、行く先々で本を手に取りながら視察した結果、視察予定時間が大幅にオーバーしてしまった(2時間以上は超過した)。これも中央大学附属中学校・高等学校の学校図書館の魅力を伝える一つの挿話(笑話)として申し添え、この報告を終えたいと思う。

参考資料

- ・中央大学附属中学校・高等学校ホームページ内 施設紹介 図書館
<https://chu-fu.ed.jp/campus/library.php>
- ・平野誠「授業でにぎわう学校図書館－教育課程の展開に寄与する学校図書館を目指して－」
<https://chu-fu.ed.jp/admission/library/>
- ・『日本教育新聞』「図書館を『知』の学習拠点に変える」(2010年9月27日)
- ・『教育家庭新聞』「学校図書館訪問記①」(2014年7月21日)
- ・『教育新聞』第3438号「学校図書館特集」(2016年4月25日)

⁵ こうしたシフトチェンジは「コンテンツベースからコンピテンシーベースへ」という新課程における学力観の移行とも符合する。